

東京の下町、下谷龍泉寺町を舞台に、大黒屋の美登利と龍華寺の信如の淡くはかない初恋を、夏祭りから初冬までの季節の移り変わりの中で描いた中編小説である。とくに、下駄の鼻緒を切った信如に、美登利が紅友禪の端切れを投げかける場面は中盤の頂点である。

樋口一葉（一八七二〜一八九六）、本名は奈津。生活に苦しみながら「大つごもり」「にぎりえ」「十三夜」など十二篇の作品を発表した、日本で最初の職業女流作家と言われている。

代表作『たけくらべ』は、

文芸雑誌「文学界」に明治二十八年（一八九五）一月から翌年の一月まで、七回にわたり断続的に発表された。同年四月、雑誌「文芸倶楽部」に訂正のうえ一括掲載され、森鷗外、幸田露伴は、その筆使いの見事さを絶賛し、一葉の名声はにわかになら高まった。

天理図書館は、「文学界」掲載九〜十四章の一葉自筆原稿を所蔵する。その内十一〜十四章は常用の金清堂製四百字詰原稿用紙のため、掲載図版のように編集者による割付指しなどが随所に記されている。またこの他、生涯最後の自選歌集『みやぎ野』や、妹邦子

に宛てた書簡などの自筆資料も所蔵する。



カットは、「文学界」の編集者星野天知に宛てた一葉書簡の封筒。消印は明治二十九年六月二十八日。一葉は同年十一月に二十四歳という若さで生涯を終え、この手紙で約束した次作の寄稿は実現されなかった。

（天理図書館 白石立春）

天理図書館開館のお知らせ

平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）
ただし3月20、27～31日は休み
（本欄にて紹介した名品の閲覧は別途申込が必要です）